

Title	接続表現の歴史的研究 一文法史・文体史の観点から —
Author(s)	高谷, 由貴
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/72431">https://hdl.handle.net/11094/72431</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 (高谷 由貴)

論文題名

接続表現の歴史的研究  
—文法史・文体史の観点から—

## 論文内容の要旨

本研究は、全8章からなり、第1章は序章、第8章は終章となっている。

第2章から、第7章まで、主として近世期以降の接続表現について、文法変化・文体変化の両面から語史を描くことを試みた。各章について順番に述べる。

## 第2章

第2章では、先行研究における接続表現の定義・分析手法を概観した上で、本論で用いる接続表現という用語を設定し、分析手法を述べる。分析の際に、接続表現と、その派生前の形式との比較を行うため、藤田(2000)による引用助詞の分析はじめとした助詞についての見解を援用する。さらに、接続表現の文体、場面の分析と関わる要素として、接続表現を使用する発話キャラクタ(定延2011)を援用することを述べる。最後に、第3章以降の考察対象の選定理由について述べた。

## 第3章

第3章では、接続表現トを取り上げ、戯曲・文芸・話芸作品に見られる接続表現トの成立について、「ト書き」との関連を主張した。

「ト書き」には次の三種類がある；①台詞等の引用②台詞と話者以外の動作を繋ぐ③演者の動作と次の動作を繋ぐ。

「ト書き」における三種類の機能は、同じく近世期の文芸作品である洒落本の「割書」にも観察され、さらに現代小説においても一部受け継がれていることを報告した。以上の資料の分析から「ト書き」から接続詞トが成立した可能性を指摘する。

## 第4章

第4章では、次章以降でトテの歴史的な分析を行う前段階として、現代日本語におけるトテについて、形態的特徴と意味の分析を行う。

引用複合辞トテは、現代語においては「ッテ」という新たな形式に変化したとされるが、トテが完全に消失したわけではなく、現在でも使用されることはあり得る。現代語におけるトテの意味について次の二点を述べる。現代日本語の小説に使用されるトテは本来の引用の意味では殆ど使用されず、一方で取り立て詞ダッテに相当する使用が多く見られる。小説の題名・著者情報から、時代小説・歴史小説に含まれる例が多いことを示した。

## 第5章

第5章では、引用複合辞トテにおける形態と意味の二つの面から変化を描き、中世後期以降のトテに起こった、特に重要と思われる変化を二点挙げた。まず、近世前期まで、引用Ⅱとしての使用の割合が最も高いことである。

『天草版平家物語』から近松浄瑠璃集まで、調査を行った資料において、トテは引用構文の第Ⅰ類(藤田2000)としての使用は、全く見られない(『天草版伊曾保物語』『天草版平家物語』)か、第Ⅱ類よりも少ない使用数である(『虎明本狂言集』近松浄瑠璃)。併し一方、引用構文第Ⅱ類として使用される例は全ての意味用法の中で、最も高い割合である。この傾向は「洒落本コーパス」以外の資料で共通している。

もう一点は、近世前期の近松浄瑠璃において、現代語のトテの手法な意味である仮定逆接と取り立てが確認できたことである。それぞれ数例ではあるが、体言を直接受ける「取り立て詞」相当のトテ、および述語の完了形を受けて、ジャトテ/タトテ/ダトテなどの形式で使用される仮定逆接のトテが、観察される。そして、それ以後の資料である「洒落本コーパス」においては、両者が引用Ⅱよりも高い割合で観察される。

以上の二点から、引用構文第Ⅱ類として頻繁に使用されるという傾向は、近世期以降見られなくなっていく、トテの主要な意味は次第に、体言を直接受ける「取り立て詞」相当のトテ、および述語の完了形を受ける仮定逆接のトテへと集約されるのが予想される。

## 第6章

第6章は、『日本語歴史コーパス 明治・大正編』に収録された雑誌・国定教科書のデータを用いて、引用複合辞トテ及び、トテが変化した形式とされる(ダ)ッテについて文体上の対立を報告した。トテと「(ダ)ッテ」とは文体・場面の点で現代語にて異なる使用傾向が見られる。

これを踏まえて本章では、近代語におけるトテ・ダッテの文体上の対立の有無を確認するため『日本語歴史コーパス』明治・大正編Iを調査した。まず、雑誌ごと、成立年ごとのトテ/ダッテの使用の有無について、調査を行った結果、次のことがわかった。著者および読者層が知識人層であり、内容が論説文中心であるという特徴をもつ『明六雑誌』『国民之友』については、トテの使用は見られたが、ダッテの使用は見られなかった。『明六雑誌』『国民之友』以外について、中間層を読者層に持つ『太陽』及び女性雑誌は、トテ/ダッテがいずれも用いられている。

続いて、文体上の特徴について、次のことがわかった。トテは、文語体/口語体いずれの文体でも使用されており、文語体での使用のみ見られるわけではない。一方、ダッテは全てが口語体であった。

したがって、文語体でのダッテの使用は見られないが、口語体でのトテの使用は資料によっては見られるということを確認した。

続いて、同一作品内でトテを使用する人物とダッテを使用する人物には異なった傾向が見られることを指摘した。『女学雑誌』において1894年に収録された『悲劇 魂迷月中双 一名、桂吾良』を例にとり、トテとダッテの話し手及び聞き手の属性・両者の関係性を調査した。

トテの使用が見られた登場人物は、若年層男女、中年層男女、幽霊・故人・和尚等多様であり、高年齢の登場人物に使用が偏る、といった際だった傾向は見られなかった。また、台詞以外の登場人物の心情等を語る「浄瑠璃」においてはトテのみが使用された。しかし一方、トテを使用せず、ダッテのみを使用する人物は、脇役・敵役が挙げられた。

この文体上の対立に加えて、文芸作品でトテとダッテが使用される場合、発話キャラクタ(定延2011)の傾向にも差が見られる。この点について本章では、定延(2011)における発話キャラクタの「格」「品」「性」「年」という基準を援用し、近代文芸作品において「品」の高い人間がトテを使用する傾向を帯びるといった変化が生じることを指摘した。

## 第7章

第7章では、助詞ダッテから派生したと考えられる接続表現ダッテについて取り上げる。トテが転じた「ッテ」とコピュラ形式の「ダ」とが結びついた形式である「ダッテ」は、近代から接続詞としても使用されるようになる。ダッテは現代語では、くだけた場面で、親しい相手に対して用いられるという使用上の規範があるとされるが、近代の戯曲資料・話芸資料にも、同様の特徴が見られる。また、定延(2011)の「品」「格」の観点で次節3.で述べる調査対象の用例を確認したところ、接続表現ダッテが女性、子ども若者といった、「格上」ではない人物によって使用されている事を報告した。

以上で本研究にて行った事を述べた。本研究で明らかにできなかったことが多くある。文法史・文体史の両面から接続表現の歴史を描く試みを行ってきたが、引用由来の複合辞から派生した形式について行った分析方法が、個別の接続表現に対してのみ有効であるのか、汎用性が有るのかの検討については今後の課題である。

特に、第2章3.3で導入した分析の指標として「発話キャラクタ」が有るが、キャラを接続表現分析に取り入れる試みはまだ十分に検討し切れず、他の接続表現形式にても使用できるか、まだ検討の段階である。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 高 谷 由 貴 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	金水 敏
	副 査	大阪大学 教授	岡島 昭浩
	副 査	大阪大学 准教授	岸本 恵実
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			



論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 接続表現の歴史的研究—文法史・文体史の観点から—

学位申請者 高谷 由貴

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	金水 敏
副査	大阪大学教授	岡島 昭浩
副査	大阪大学准教授	岸本 恵実

【論文内容の要旨】

本論文は、戯曲・文芸・語芸作品に見られる接続表現のうち、引用形式「～ト」に由来するとみられるト、トテ、ダッテ等について、その成立を文法史・文体史の両面から論じている。接続表現の特徴を、各形式についての歴史の変遷をたどる語誌としての体裁をとりつつ、それぞれの形式の文法的・文体的変遷の両面から分析を行うことで、現代日本語に見られる接続表現がいかにして現在のような意味・形式に至ったかを描くことを目指している。

第1章（序章）では、本論文の目的と構成を述べている。

第2章では、先行研究における接続表現の適宜・分析手法を概観した上で、本論で用いる「接続表現」という用語を定義し、分析方法を述べる。特に、分析の際に、接続表現と、その派生前の形式との比較を行うため、藤田（2000）による引用助詞の分析はじめとした助詞についての見解を援用する。

第3章では、接続表現トを取り扱う。特に、これまで接続助詞トからの派生形式であると考察されてきた接続表現トの成立について、戯曲・文芸・語芸作品に見られる「ト書き」との関連を主張する。「ト書き」には次の三種類があるとする。①台詞等の引用を行うもの ②台詞と話者以外の動作を繋ぐもの ③演者の動作と次の動作を繋ぐもの。「ト書き」における三種類の機能は、同じく近世期の文芸作品である洒落本の「割書」にも観察され、さらに現代小説においても一部受け継がれていることを報告し、その分析から「ト書き」から接続詞トが成立した可能性を指摘する。

第4章では、次章以降で取り扱うトテの歴史的分析の前段階として、現代日本語におけるトテの形態的特徴と意味の分析を行う。

第5章では、引用複合辞トテの形態・意味の二面から、その歴史的变化を見ていく。第一には、近世期以降にトテに見られる変化について指摘する。第二に、トテが逆接用法を中心としていく以前、引用としての使用が頻繁に見られていたこと、またその用法は藤田（2000）で言う引用構文第Ⅱ類であったことを述べる。

第6章では、引用複合辞トテおよび、トテが変化した形式とされる（ダ）ッテについて文体と場面の二つの観点からその差異を捉える。前者が文語体で、後者が口語体を中心に使用されるほか、文芸作品でトテとダッテが使用される場合、発話キャラクター（定延 2011）の傾向にも差が見られることを指摘する。

第7章では、助詞ダツテから派生したと考えられる、接続表現ダツテについて取り上げる。ダツテは現代語では、砕けた場面で親しい相手に対して用いられるという使用上の帰阪があるが、近代の戯曲・話芸資料でも同様の特徴が見られる。また、定延(2011)の「品」「格」の観点から見て、接続表現ダツテが女性、子供、若者といった「格上」ではない人物によって使用されていることを報告する。

第8章では、終章としてここまでの内容をまとめている。

#### 【論文審査の結果の要旨】

本論文には、いくつかの優れた試みが盛り込まれている。まず方法論として、近年、発展著しい歴史コーパスを最大限活用して、大量の資料から効率よく用例を収集し、計量的な手法にも結びつけている点である。コーパスを用いた研究は昨今、特に新しいとは言えないが、本論文では特に中世以降の歴史コーパスと現代語コーパスをつなげて、歴史研究にコーパスを活用する道筋を明確に示した。

また、接続表現トの歴史的起源について新しい説を提示している点である。接続表現トとは、「やがて陰士は山の芋の箱を恭しく古毛布にくるみ初めた。なにかからげものはないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寐る時に解きすてた縮緬の兵古帯がある。」(夏目漱石『吾輩は猫である』)のような表現で、契機性と「発見」の意味合いが含まれていることが多い。これは従来、接続助詞トを起源とし、助詞が前接助詞から離れて接続詞となったとする説が有力であったが、本論文では歌舞伎台帳その他に見られるト書きがその起源の一つであるとの説を提示した。ト書きは近世洒落本の割書に繋がり、散文の地の文への流れもたどることが出来る。このト書き由来説は、従来の接続助詞由来説を覆すには至っていないが、今後とも検討されるべき説となり得ている。

さらに、トテ、ダツテの分析として、発話者のキャラクタによる分類を取り入れた点が挙げられる。ここで言うキャラクタとは定延利之氏によって提唱された理論によるもので、発話スタイルに基づいてキャラクタを「性」「年」「品」「格」の四つの観点から分類するものである。従来の文体による分類に加えてキャラクタの観点を加えたことで、一層の発展性が加わった。

しかしながら、問題点も数々ある。今回取り上げた諸形式は、引用辞トに由来するものという共通点はあるが、時代区分、取り上げた資料のジャンル、分析の観点などに一貫性が乏しく、一論文としての統一感を欠く点は否めないであろう。いくつかの章では、分析が十分深められないまま終わらせてしまっているとの印象もぬぐえない。コーパスの操作やデータの提示の仕方、また統計処理等に不十分な扱いがいくつか見いだされる。

このように、課題も残る本論文ではあるが、接続表現の歴史的研究の新展開を象徴する論文であることは間違いない。本論文を足がかりに今後も新たな方向性が広がっていくことを期待させる。以上の点から、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する次第である。